

若者の移行における困難の複雑性

—就労および家族問題に着目して

児島功和・藤井（南出）吉祥・船山万里子・宮島基

1. はじめに：問いの所在

1990年代以降、若者は「フリーター・ニート」という形で社会問題化された。当初は「勤労意欲の低下」として取り上げられたが、調査研究の蓄積により産業構造・就業構造の変容と深く結びついた労働問題であるといった認識が広がり、また、そのような不安定層が相対的に低階層に偏っているといった認識も広く共有されつつある¹⁾。

しかし、学卒後の就労を含む社会生活において困難を抱えた低階層の若者の実態に迫るには、就労状況を対象とするだけでも、背景にある家庭階層を指摘するだけでも十分ではない。なぜなら、そうした若者の困難性の内実は、労働と家庭という二つの領域の問題が、時間経過の中で複雑に絡み合ったところにあるからである。後述するように、本稿で対象とする若者は、不安定就労や無業を繰り返しながら、家庭における困難を抱えてもいた。家庭は、経済面のみならず情緒的な面での資源でもあり、親子関係の編み直しなど、〈子どもから大人へ〉の移行が起こる当の場という意味で、若者の移行過程に大きな影響を与えてもいる。したがって必要なのは、労働や家庭という領域における個別要因を別々に取り出すのではなく、生活全般においてそれら要因が時間経過のなかでいかなる作用をしているのかを明らかにすることである。本稿では、これを第一の課題としたい。

第二の課題は、労働や家庭という社会生活を営む上で中心とされる領域で問題を抱えている若者が、何を資源にそうした日々に向き合い、いかにして自身

の生活や人生を組み立てようとしているのかを明らかにすることである。労働と家庭における不安定性という悪循環に介入しうる契機はどこに、どのような形であるのか。そのための資源の一つとして、ここでは特に友人を中心とするインフォーマル・ネットワークに着目する。

以上、二つの課題の考察を通じて、生活を支える基盤の不安定化・流動化が進行する現在において、さまざまな困難を抱える低階層の若者が、〈子どもから大人へ〉の移行をどのようにして行なっているのかという実態に迫りたい。参照するのは、若者の移行過程を包括的に把握可能な、高校在学時から卒業後5年目までを追った筆者らの参加する経年的調査によるインタビュー・データである。

若者の移行研究は急速に蓄積されつつあるが、労働の問題と家族の問題双方を射程に入れた分析を試みる本稿課題との関連では、移行に困難を抱えた若者に焦点化し、労働・学校・家庭それぞれの局面から実態を分析している小杉編(2005)、低階層の若者が抱える「不利が不利を呼ぶ」状況をていねいな記述により描いている部落解放・人権研究所編(2005)、「貧困」問題とそれを覆い隠している家族主義的動向との関連で若者の移行を捉えた大澤(2009)、宮本(2009)が重要であると考えている。これらはいずれもインタビュー・データに基づく質的把握の手法をとり、困難状況を形成する要因を複合的に捉えている。だが、小杉編(2005)では、困難要因の析出が課題となっており、就労上の問題や家族問題がそれぞれにどのように作用しあっているのかという複雑性については充分扱われてはいない。部落解放・人権研究所編(2005)では、家庭は基本的に移行における資源の多寡という視点から捉えられており、〈子どもから大人へ〉の移行が起こる場としての家庭といった視点、自立をめぐる課題についての考察は課題とはなっていない。大澤(2009)・宮本(2009)は、「家族のなかの若者」という視座を踏まえつつ、若者の自立過程の阻害状況を提示しそれに対する社会的課題を提示しているが、仕事と家庭のリスクの累積化という側面にまで踏み込んでいるわけではない。

第二の課題にかかわって、若者のネットワークについての分析も徐々に展開されてきている。堀(2004)は、移行に困難を抱える若者へのインタビュー調査

から、ネットワークを「孤立型」「限定型」「拡大型」の三つに類型化し、支援課題を提起している。また内田(2005)は、同質性の高い構成員からなる「部落ネットワーク」に着目し、その正負両面の機能を描き出している。しかしこれら論考は、いずれも職業的移行という視点からネットワークの機能を分析したものであり、若者たちにとってもう一つ大きな移行課題としてある家庭生活への影響までは考慮されていない。一方、小西(2002)、新谷(2007)、中西・高山編(2009)の論考は、それぞれの若者が生きている労働・生活の文脈を実情に即して描き出しながら、厳しい状況に置かれながらもそれなりに「なんとかやっていく世界」(中西・高山編2009)を形成していることを見出している。この「世界」に対する評価や政策的課題との兼ね合いなど、探求されるべき問いは残されているが、本稿ではこの「世界」(とりわけ対象者が形成しているインフォーマル・ネットワーク)が果たしている機能について、生育家族と自立との関係において問うことを主眼としたい²⁾。

以下、節構成としては、2節で本稿が依拠する調査の概要と対象の性格を説明する。3節では、分析対象者3名の若者が直面した問題を就労・家庭の二側面において整理し、それらがいかなる作用関係にあるのかを明らかにする。4節では、困難状況をどうにか支えることができている資源に注目し、対象となる若者がそれぞれの状況下で自立をめぐるっていかにしてその資源を用いているのかを、特にインフォーマル・ネットワークに着目して考察したい。終節となる5節では、それまでの議論をまとめ、今後の課題を提示する。

2. 本調査の概要と対象

(1) 調査概要

本調査は、東京都内にある二つの普通科高校(入試偏差値「中位」のA高校、および同「底辺」のB高校)を2003年3月に卒業した若者を対象としている。経年的インタビュー調査であり、対象者が高校3年次、卒後1年目・3年目・5年目の計4回聴き取りを行なっている³⁾。すべての調査は事前に質問項目を設定して臨んでいるが、実際のインタビューではその時々会話の文脈を重視する「半構造化面接」の手法を用いている。質問項目は、その時々就労状況、家族およ

び友人関係、趣味など多岐に渡っている。

本調査の意義は、長期にわたる移行過程を包括的に分析できる点にある。日本におけるこれまでの若者の移行調査は、まず全体像を把握する必要から、質問紙による単発の量的調査が主流であった。しかし、不安定化している若者の移行状況を包括的に捉えるためには、就労状況や家庭環境、友人関係等の経年的変化やそれらの相互関係、またその時々状況に対する若者自身の意味づけをも把握可能な調査が必要である。本調査に備わった上述の諸特徴は、そうした動態的な把握を試みる上で効果的である。また本調査の対象者には、民間企業などに新規学卒就職した者、高卒後一貫して非正規雇用である者、会社経営者や大学院進学者、出産して家庭に入っている主婦など、多様な若者を含んでいる。そのため、同一コーホート内での「人生経路 (biography)」の分岐がどのように起こっているかを理解することも可能となっている。

(2) 対象設定

本稿で中心的に取り上げるのは、5年目調査時点で非正規雇用労働者として働いていた女性3名(浜野美帆、若林理恵、下川彩乃)(すべて仮名)である。詳細は次節以降で詳述するとして、ここでは本調査対象者の中での位置を示したい。

高卒後5年目に当たる第4回調査では、対象者総数31名のうち11名が非正規雇用で働いている。しかし、同じ非正規雇用でも、労働条件や採用条件に階層性がある。大きく腑分けをすれば、11名中4名(男性2名、女性2名)は、四年制大学・専門学校を卒業後、非正規雇用の中でも資格が求められる職種(福祉職・添乗員)や、正社員(職員)登用のある採用条件で働いており、比較的安定した就労生活を送っている。また、この4名中3名が「中位校」のA高校出身である。

それに対して他の非正規雇用者7名は、劣悪な労働条件で正社員になる見込みもまったくない状況で働かされており、これまで就業・離職・失業を繰り返してきた。また、7名は全員が「底辺校」のB高校出身でかつ女性であり、また短期大学卒1名を除く6名が高校卒である。このうちひとり親家庭の者が4名おり(いずれも母子家庭。うち1名の母親は調査期間中に死去)、過去・現在を含

め生活保護受給経験のある者が複数いるなど、本調査対象者の中でもこの層は家庭の経済的困窮が際立っている。

本稿が取り上げる浜野、若林、下川は、非正規雇用労働者の中でも後者7名に含まれる。とりわけこの3名は、彼女らが職業的移行の困難だけでなく、家計状況と深くかかわった家庭の問題（特に親子間関係のトラブル）をも抱えており、リスクの累積性が顕著である。

以下では、彼女らが労働と家庭のそれぞれの領域で抱えている問題を詳細に描出しつつ、特に家族の問題がどのように就労の問題とかわり、困難をもたらしているかを検討したい。

3. 就労における問題と家庭での問題の相互作用

対象者である3名の女性たちはこの5年間、就労生活の不安定性のみならず、家庭にも何らかの問題を抱えており、しかも就労上の問題と家庭での問題は相互に絡み合うかたちで生起している。本調査の他の事例では、比較的スムーズな職業的移行により家族との葛藤が解消される兆候が見られたり、過酷な就労生活を家族の支援により乗り切っていたりというケースがあったが、それに比して、彼女らの抱えている困難さは相対的に深刻であるように見える。では、彼女らの就労および家庭における問題は具体的にどのようなものであり、それらはどのように関連しあっているのだろうか。本節では彼女らが抱える問題を可能な限り詳細に描出することを通して、不利な立場にある若者の移行期における困難の内実を明らかにする。

2008年	2007年	2006年	2005年	2004年	2003年	卒業
7月～従属雇 8月～従属雇 1月～ ストラック	9～10 月 事務	4月～12月 専任 主婦	4月～12月 専任 主婦	10～3月 ヘアブ ル	正規就職 2001.6.5退職	若林理恵
2007.2～チャットレディ	12～5月 居座雇	2006.5～2007.1 専任 主婦	2004.10～2005.4 専任 主婦	2004.10～2005.4 専任 主婦	正規就職 2001.2退職	浜野美帆
				2006.5～ 二重派遣(新規加工工場)		下川綾乃

(1) 就労における問題

各対象者の就労状況を時系列で表すと明らかなように、彼女らは就業（しかもほとんどが非正規雇用）と失業を繰り返し、断片化したキャリアパターンを描いている。彼女らは、90年代以降の雇用システムの変容によってとりわけ不安定な就労生活を余儀なくされ、職業的移行に苦しんでいるケースである。彼女らが就労面で抱える問題についていくつかの特徴を指摘しておこう。

まず、3名のうち浜野と下川は、高卒と同時にそれぞれ美容院と総菜屋に正規雇用に就職しているものの、一年前後で離職している。浜野にとって美容院への就職は「やりたいこと」にかかわる仕事であり、下川にとって正規就職は親の勧めるところでもあったため、無理を押しがまんしていた。しかし、浜野はストレスによる肌荒れの悪化や抑うつ状態に追い込まれ、下川は3か月毎の店舗異動を強いられるなか上司から理不尽な叱責を受け、それぞれ離職を余儀なくされている。高卒で就職できる仕事の性質は、多くの場合長く続けられるものになっていない。彼女らの職場を含め、高卒就職者の労働実態は、常態化する長時間労働（違法含む）、人格否定とも感じられる先輩からの指導、度重なる異動、殺伐とした同僚関係など、苦痛に満ちたものであった。

また、3名はこの5年間で多くの非正規雇用の仕事に就いているが、彼女らが従事するのは、条件・待遇、ステップアップのルート、仕事内容の専門性などの指標において、契約社員や専門的な派遣労働などに比して低位かつ劣悪である。浜野が派遣されたテレアポの仕事は、必ずしも借金を必要としない人に電話で融資を持ちかけるものだったが、ノルマを与えられるばかりで仕事内容に疑問を感じ続けていた。あるいは若林が勤めたスナックは、古くなったお酒を飲まされるなど、衛生管理のずさんな職場であった。その他、身体酷使の労働内容、横行する職場内でのいじめ、上司や客のセクハラ、一方的な解雇や倒産などにより、短期間で離職と失業を余儀なくされた。それだけでなく、短時間・低収入をカバーするために複数の仕事を掛け持ちすることもたびたびで、日々の就労生活が断片化されている。

さらに彼女らは、正規雇用を望んでも叶えることは難しい。フリーターから正社員への移行の難しさは量的調査⁴⁾において指摘されているが、本調査においても、5年間でフリーターを経験した者15名のうち正社員へ移行した者は2名にとどまり、いずれも男性である。女性の場合、一度離職すると再び正規雇用の職に就くことは難しくなっている。したがって、不安定就労から脱する契機を持ってないままに、かといって安定した就労に展望を見出すこともかなわず、フリーター生活に滞留し続けている。

(2) 家庭における問題

次に、家庭の状況について見ていきたい。1節で指摘したとおり、移行期にある若者にとって家庭は大きな意味を持つ。以下では、①資源という側面から、②家族の関係性から、彼女らの家庭における問題を整理したい。

① 家庭における経済的基盤の脆弱さ

まず、彼女らの移行における家庭での問題をみると、その経済的基盤の乏しさが指摘できる。生活保護受給世帯であった浜野・若林はもちろん、下川の場合も、居間と寝室の二部屋に親子3人が暮らすという住環境に置かれており、ゆとりのある暮らし向きとはいえない。

こうした家計状況による制約は、高卒後の進路の選択肢を著しく狭める。たとえば浜野は、高卒後美容師の専門学校に進学する予定で入学試験にも合格していたが、入学金100万円を用意することができず断念している⁵⁾。

しかし、とりわけ生活保護を受けている浜野と若林の場合、家庭の経済的基盤の弱さは、彼女らの移行に対する援助の乏しさを意味するだけにとどまらない。なぜなら、彼女らは家計負担や家事の分担など、家庭を支えるために不可欠な責務が課されているからである。たとえば若林は、短大に進学し翻訳家を目指していたが、病身の母親の世話と家事を一方向的に押し付けられ、落ち着いて勉強できる状況になかった。さらに別に住んでいた祖母の介護までも任せられ、実家と祖母宅とを往復する毎日だった。彼女の短大卒業後、同じように母親に家事負担を強いられていた妹が家出をしたため、その分も若林の家事負担となっている。

また浜野は、高校在学時からアルバイト代を家計に入れており、就職後もしばらくは、ひとまず収入の全額を家計に入れたうえで、必要な分を引き出す、というかたちでやりくりしていた。そして現在も、病身の母親に代わってきょうだいとともに家計を支えている。彼女は、その収入を自分自身のために用いることもままならないのである。

さらに浜野の場合、課せられる家計負担が高額であるために、収入の額をめぐり家族間の対立も生じており、彼女を追い込んでいるという状況がある。浜野家の家計にとって、彼女の給料が占める割合は大きく、収入が不安定になれば家計全体も大きく揺らぐ。そのため、彼女が正社員で収入が安定していた時期には問題は生じていなかったものの、離職後に収入が不安定になると、「給料が途切れると困る」と家族から叱責を受けるようになった。浜野にとっては、家族のためにもがんばって仕事を続けなければと思い、次を探す余裕もなくぎりぎりまで耐えて働き続けたうえでの離職であっても、母親からは「こらえ性がない」「お前の悪い癖は、急に嫌だと思ったらすぐに辞めて、それで仕事がないっていう状態。(中略)辞めるんだったら次の仕事を探してから辞めて。次のことを考えて」と責められた。そして卒後3年目の調査では、約束の金額を家に入れられない自分を「あたしが悪い」「ぐうたらだから」と責めていた。

② 家族との葛藤

以上に指摘した資源の乏しさという問題とも一定重なり合いながら、もう一方で指摘できるのは、家族関係のこじれとそれによる葛藤状況である。なかでも特に注目したいのは、母娘関係において生じる可能性が指摘されている葛藤状況である。

母親との葛藤状況が母親による支配／依存のもとに表れているのは、若林と下川である。若林は、服装や日ごろの予定、恋人や友達との関係、行動範囲などについて常に口を出され、母親の好みと合わないものには文句を言われ、制限された。先に述べた家事負担および祖母の介護についても、若林によれば娘に対する母親の支配／依存としての性格が強い。この母親の支配／依存は彼女の進路選択を大きく規定してもいる。短大進学に際しては、英語を学びたいという彼女の思いと、女らしさを身につけさせたい親の希望との折り合いのなかで進路先が決定され、資金集めなどにも協力してくれていた。しかし実際の短大生活では、授業が速すぎて追いつけないことや、服装や礼儀作法、出席管理など「中学校並に厳しい」短大の指導などに苦痛を感じていた。さらに家に自室がなく、すぐに母親が干渉してきて勉強時間が取れないことに強い不満を感じていた。そのため、短大進学当初は四年制大学編入を考えていたが、「あの家において進学しても疲れるし、バイトしてとっとと(お金を)貯めて、とっとと(家を)出て、バイトしながら就活したほうがいい、利口」と、結局編入せずに、進路未定のまま卒業した。卒後1年目および3年目の調査では、「家に自分の居場所がないんじゃないか」「(家を)離れたい。1分1秒でも早く、この家から消えたい」などの切実な語りが繰り返されている。

また下川は、専業主婦である母親からの強い干渉の下におかれ、高校時代からアルバイトなどに強い制約がかけられていた。それはとりわけ下川の失業中において強く表れ、外出や生活全般にまで及んでいた。その背景として、幼い頃から繰り返される父親の母親に対する暴力があり、母親は下川が離家するときには父親から逃れるために一緒についてくると話している。下川自身は、母親が家に閉じこもりがちで人と交流せず、アルコール抜きでは自分の考えを主張できないことを厭わしく思っているが、実際には夫婦間の衝突を調整する役

回りを引き受けており、家族との間に距離をとりきれずにいる。

一方、浜野の場合、美容院で働いていた頃までは母親を「むかつくこともあるんだけど、やっぱり尊敬している」と語り、対立・葛藤の様相はなかった。しかし美容院を離職した後は、上記のような家計負担に端を発する母娘間の対立・葛藤が前面化している。この変化の背景には、経済的側面とともに、母親がかつて仕事で実現していながらも、体調を崩して断念せざるをえなかったメイクの仕事を娘に託していた、という母親の期待と、それが浜野の離職により途絶えてしまったことへの苛立ちといった思いを読み取ることができる。

母娘間葛藤については近年、母親が娘を「支配」しようとする傾向や娘の精神的「母殺し」の難しさ（斉藤2006）、また娘を従わせようとする母親（信田2008）など、母娘間に特有の問題として注目されつつある。そこでは社会的に劣位に置かれた女性のジェンダー問題もかかわりながら、母親が自分の実現できなかったライフコースを娘に託し、進学先や就職先など娘のキャリア選択に干渉する事例などが示されている。斉藤・信田が参照する事例と本稿対象者では、社会階層や経済的制約など、属性の違いは大きい。浜野のケースに典型的なように、彼女らにおける母親との葛藤の背景には、心理的な側面にとどまらず経済的要因も密接にかかわっているといえる。こうした違いがあるものの、本稿の対象者たちにおいても母親による娘への支配／依存という構図は共通して確認され、彼女らにとってそれは移行期における大きな足枷となっている。

いずれにしても彼女らは家庭において、母親からの支配／依存による強い精神的負荷を、両親間のDV、家事負担、貧困といった問題とともに抱え、そのために家庭において安らげる場をもてずにいるのである。

（3）就労と家庭の問題の相互作用

以上のように、彼女らは仕事でも家庭でもそれぞれに問題を抱え、そのためにどちらにおいても安心して働き、安らぐことができない状況にいる。だが、彼女らが抱えている困難は、そうしたいくつもの要因をそれぞれに明らかにするだけでは理解することができない。直面する問題を時間軸に沿って追っていくと、それらは互いに影響しあい、絡み合っていることが分かる。

まず、家庭における問題が就労の問題を引き起こしているケースとして若林が挙げられる。家族内のケア労働を母親に強制され、かつ母親から過干渉で依存的なかかわりを受けることによって就労の機会を奪われている若林は、家族間関係の問題が就業へのスムーズな移行を阻害しているパターンとして理解できる。さらに生活保護費は世帯ベースで計算・支給されるため、彼女が働いた場合にはその収入分だけ保護費が削られることとなる⁶⁾。そのため彼女は、収入が公にならないようにうまく対応してくれる知り合いのところでしか働かせてもらえずにいた。しかもそれら職場は母親の紹介であり、その意味でも彼女は母親から逃れづらい状況に置かれていた。

逆に、就労の不安定さが家族関係を悪化させているケースとして下川が挙げられる。母親からの依存を強く受けている下川であるが、かつて正社員で働いていた時期は、その影響力は比較的抑えられていた。就職し、家を離れて過ごす時間が増すにつれ、両親が二人きりになる時間も増えることにより、両親の仲が回復したという。そして母親からの干渉がなくなったわけではないものの、仕事のことなど、両親と話す機会も多くなったという。しかし離職後は、母親と顔を合わす時間も自ずと増すこととなり、干渉もまた増大していき、母親に対する憤懣が強まって「一時、母親を殺そうと」思ったことがあるほどに対立を深めている。特に収入がない下川は、何をするにせよ母親からお金を借りざるをえず、そのことが干渉と衝突の度合いを強めてもいた。これらの経緯から、下川が安定した職を得られずにいたことで母親の干渉を招き、それに伴う就労制限や家族関係のこじれが強化されてしまったことが読み取れる。

仕事と家庭の双方の領域における問題が相互に作用し、断つことの難しい悪循環に陥っているケースもある。先述の通り、浜野は仕事が不安定になると母親や姉から家計への繰入金が無くなることを責められ、強い緊張状態に置かれている。この過程は就労の不安定化が家族関係に悪影響を及ぼす例として解釈できる。しかし浜野の場合、家族から責められ家で精神的に休息をとることができないために、就労生活にまで影響が及んでいる。卒後3年目調査では、収入のために働き続けられる労働条件・職場環境にない職場を転々とするうち、「仕事に対する執着がなくなった」と疲労を隠せない様子だった。卒

後4年目には、多いときで仕事を三つ掛け持ちしても家計への繰入金金のノルマ(約20万円)を達成することができず、精神的に追い詰められて蕁麻疹を出すなど体調を崩し、仕事を続けられなくなることもあったという。しかしそのような状況でも母親や姉からの叱責はやむことがなかった。浜野は仕事とノルマに追われ休まる場所を持ってないことに「うちはどこでストレス発散すればいいの?」と苦しさを抱え込んでいた。彼女の事例は、不安定な就労状況が家族関係を悪化させ、親子間での衝突が就労継続や再就職のための身体的精神的基盤を奪い、再び家族からの叱責を誘発するという悪循環を生み出していると理解できる。

(4) 小括

本節では、対象者が就労および家庭において抱えてきた問題を整理したうえで、それらの問題が相互に関連していることをケースに即して確認してきた。彼女らが抱える仕事・家庭それぞれの領域での問題は、互いに誘発しあう関係になっているため、どちらかの領域を足場にして困難を脱していく契機をもつことができない。とりわけ家庭における問題は、経済的基盤の弱さという側面のみにとどまらず、母親からの支配/依存といった精神的負荷も含まれており、このことが家庭への困り込みとして、高卒後長期にわたって彼女らを苦しめる要因となっている。

その結果として、彼女らの困難は、少し先の将来を見通すことすら難しいといったかたちで結晶化している。下川は、無業状態であった卒後3年目には、家にこもりがちで友人にすら満足に会えない状況に、「やばい、私」「私おかしい」と危機感を募らせていた。そして卒後5年目調査では、高校時代からの夢であり一時は養成所にも通っていた声優の仕事を諦めたという。その経緯を彼女は「私の人生、すべて勢いなんすよ」「守りたいものないし、大事なものないし」ということばで語っている。また若林は、母親との緊張状態がピークに達していた卒後3年目調査で、「今はいかに、今の普通の自分を保つかってことでいっばいいいっばい。これ以上何か(負荷が)かかってきたら、私はもう潰れるしかない」と語っている。さらに浜野は、卒後3年目の調査でも、5年後・10年後の見通し

について「死んでいると思う」「うつ病になっているかもしれない」と語っていたが、卒業5年目のインタビューでは、「一番思うのは、先が見えない。(中略)今はすごい狭い空間のなかを一生懸命脱出しようと思ってる感じです。追い込まれて追い込まれてるような感じ」と先の見えない苦しさを吐露している。

仕事にも家庭にも安心していられる場所をもたない彼女らは、安定して見据えられる将来をも持たぬまま必死にもがいているといえる。

4. インフォーマル・ネットワークと自立の契機

以上見てきたように、彼女らは職場にも家庭にも安住することができず、現状を打開したくてもその方途が見出せずにいる状況にある。しかし彼女らの生活には、そうした困難をなんとかやり過ごし、それを乗り越えようとする側面を垣間見ることができた。なかでも彼女らにとって大きいのは、友人関係と、それを中心に形成されているネットワークの存在である。本節ではそういった、彼女らにとって大きな意味をもっているネットワークに着目し、その機能や基盤、変容を追う。

(1) インフォーマル・ネットワークの機能とその変容

これまで本調査では、経済的に不安定で寄りかたなりうる職場のコミュニティを持たず、また家庭にも居場所を見出せないB高校出身の女性たちが取り結ぶネットワークに着目してきた。このネットワークは、高校在学中にクラスや授業、趣味などを介して形成された友人関係が、多少の変容を経ながら卒業後も持続し、そのグループ同士もまた別のグループを介してつながっているというものである。地理的には彼女らに馴染みのあるB高校周辺の地元地域を中心としているため、私たちはこれを「地元ネットワーク」と表してきた。

本調査で「地元ネットワーク」に着目してきた最大の理由は、B高校出身の女性たちが就職先で心身ともに傷つけられ、多くのケースで離職にまで追い込まれているなかで、「地元ネットワーク」を構成している友人関係が彼女らのストレス対処や離職後の回復過程において重要な役割を果たしていたためである。本稿対象者に限れば、浜野はビジュアル系のインディーズバンドという

趣味を介してつながっている西澤菜穂子とともに、高卒後もしばしばライブに行ったりして過ごしていた。そして過度のストレスから離職した後は、西澤の家を「第二の家」としてたびたび訪れ、心の支えとしていた。また下川は、高卒後同じ会社に就職し現在も同社で勤続中の内田玲奈と、共通の趣味であるアニメのイベントに何度も通っていた。仕事で忙しい内田に代わって、無職であった下川がチケットを取ることもあったし、下川の家とは異なり家族が和気藹々としている内田の家で夕飯を食べることもしばしばあった。

卒業後3年目調査では、こうしたネットワークが持つ機能を、個人がそこから得ている社会関係資本という視座から捉え、仕事の情報など具体的な資源をもたらす機能（道具的機能）と情緒的な安定をもたらす機能（表出的機能）とを対比するかたちで注目した。まず道具的機能に関して言えば、彼女らは知人や知人の親などから仕事を紹介してもらうなどして互いの便宜を図っていたが、その仕事は不安定な状態から抜け出せるようなものではなく、具体的な支えとしての機能は脆弱なものでしかなかった。一方の表出的機能に関しては、高卒直後の就労で負った精神的ダメージの回復や、不安定な生活から生じるしんどさをお互いに受け止め支え合うといった役割を果たしていた。

卒業後5年目調査においても、彼女らの形成していたネットワークのもつ上記のような機能は、依然として重要な働きをしている。しかし同時に、時間の経過に伴って、彼女らがもつネットワークにも一定の変容の様子がうかがえる。それを道具的機能・表出的機能両面から追ってみたい⁷⁾。

まず道具的機能にかかわる変容としては、彼女らがもっている関係の広がりという部分に現れている⁸⁾。それらは彼女らが背負ったしんどさを受け止めてくれる表出的機能の広がりであると同時に、それだけ具体的な資源を得られる機会・チャンネルが増すことも意味している。高卒直後の段階においては、日常接する社会関係として家族もしくは同級生とのかかわりがほとんどを占めていたのに対し、徐々にその他の大人が介在するようになってきている。浜野は、友人である西澤の家に何度も通うなかで、西澤のみならずその家族との交流も深まり、仕事を紹介されるなど具体的な支えを得られるようになっていく。また若林は、地域社会で出会い親身になってくれる大人たちとのつながりによ

て少しずつ関係を広げている。3年目調査では、高校生である弟の野球部仲間の母親と話をできる仲になっていた。また5年目調査では、母親が通院に使っていたタクシーの元運転手がアルバイトを紹介してくれるというエピソードが語られており、端的に道具的機能の広がりを示している。こうした大人たちとのかかわりは、同世代間で交わされるものとは異なる性質の情報や道具立てを投げかけてくれるという点で、彼女らにとって貴重な資源となっているのである⁹⁾。

もちろん、そうした道具的機能の向上として捉えた新たな関係の広がりにおいても、彼女らの抱えた問題に対して親身に相談に乗ってくれるなど、情緒的な安定をもたらす表出的機能の側面を見出すこともできる。だが表出的機能にかかわる変容として大きいのは、これまでに形成してきた関係自体の質的变化である。

浜野は高校時代、西澤とは違うクラスに在籍しており、遊ぶ仲間はおそらく同じクラスの友人で、西澤とはバンド関係の趣味でつながる程度の仲であった。しかし卒業後には、家が近いことから頻繁に会って遊ぶようになり、バンドへの思い入れが冷めた後にも西澤との交友は続いている。そのなかで、浜野は西澤と互いのつらさを共有したりもしていたが、家計の極端な逼迫状況や自身に家計負担の多額なノルマが課せられていることにまで踏み込むことはなかった。しかし高卒後4年ほど経ったある時期、親との確執がピークに達し、自分が抱えているしんどさをその背景からすべて打ち明けた。同様に西澤もまた、それまで内緒にしていた自身の借金のことについて、浜野に打ち明けている。それ以来、互いの関係は「素でいられる」「将来のこととか、話す内容は濃くなった」とのことである¹⁰⁾。

(2) ネットワークを維持するための条件

彼女らのネットワークは、道具的にも表出的にも引き続き重要な働きを担いながら、人間関係の広がりや友人関係の深まりのなかでその機能や役割を次第に変化させてきている。だがそうした変化をともなったネットワークの存在は、彼女らの間で当然のように維持されているものではないという点には留意が必

要である。

たとえば下川は、正社員の仕事を辞めてからは次の仕事がなかなか見つからなかったが、この時期は母親からの干渉がますます強まり、両親間にもトラブルが増長していた。家族間にそうしたストレスを抱えていた下川にとって、内田とのアニメのイベントを介した交友が支えとなっていたのは間違いない。だが収入のない彼女は、経済的にイベントに参加できなかったこともあったという。また経済的事情により、友人との交流の機会を逸するということは、下川が親しくしていた竹内奈央とのやり取りにも表れている。「下川さあ、遊ぼうかなと思うけど、大丈夫かなーと思ってさ、誘えないんだよ。映画とか誘おうかなーと思って、下川いま仕事ないでしょう。だから大丈夫なのかなーと思って躊躇しちゃう」と話す竹内に対し、下川は「行けるんだよ、でも、お金ないからなー」と答えていた。つまり収入の不安定さが制約となり、時には配慮も重なりながら、友人との接点を持ちづらくなっていたのである。

あるいは若林の場合、友人との交友は母親による干渉によって制限されている側面が強かった。遊びにいくにしても、「いつ誰とどこに何時に行って何時に帰ってくるか言わなきゃいけない」といい、「その日に親の予定があればダメって言われ」てしまう。進学した彼女には短大にも新しい友人がいたが、厳しく門限が決められるなど母親からの監督が強く、また母親に代わって家事全般を引き受けているために、友人と付き合うことが物理的に制限されているのである。

高校生活をきっかけに形成されたこの友人関係は、卒業後5年に渡り変容を伴いながら維持され、さまざまな問題を抱える彼女らを支えてきた。しかし、その友人関係の維持およびそこへのアクセスは、不安定な収入や親の干渉などによる経済的あるいは物理的な制約を受け、ぎりぎりの条件の下でようやく可能となっているのである。

(3) 閉じた家族関係の相対化

以上のように、さまざまな制約に直面しながらも、彼女らは形成してきたネットワークを維持してきた。そして、異世代間に広がり同世代間に対して互いの

関係を深めながら、そこで形成される人間関係はこれまでには見られなかった働きをもち始めてもいる。それは、生活の基盤となる家庭において親と葛藤を抱えていた彼女らの多くが、このネットワークを通じて、いわば閉じられた形で抱えたその家族間問題を相対化し変化させるきっかけを得ているという点である。

上述のように浜野は仕事が安定せず、母親や姉からの経済的・精神的な圧迫を感じていたが、西澤やその家族との関係のなかでそのストレスを軽減させ、やり過ごすことができていた。彼女は仕事で抱えたストレスを西澤の母親に相談し、家を離れる際の物件探しも西澤の母親に手伝ってもらっていたという。浜野にとって西澤の家は、表出的にも道具的にもきわめて重要な役割を担ってきたのである。さらに浜野は、親に責められた際には自分の思ったことをうまく言葉にできないと3年目調査では語っていたのであるが、5年目調査の際には「(お金は)自分のことに使いたい」と反抗し、一方的に責められるだけではない関係へと一歩を踏み出すきっかけをつかみかけている。その変化は、西澤や西澤の家族が話を聴いてくれることにより、そこを足場とすることでもたらされたといえるのではないだろうか。

また若林の場合、祖母の介護のため頻繁に祖母宅で暮らすようになり、携帯電話を切るなど工夫して友人と会うことが可能ともなっていた。祖母の介護自体は母親の支配の一部であったものの、結果的には母親と物理的に離れて過ごす時間が確保されたのである。また彼女は、先述のように弟の友人の母親に相談するなかで、自分への親のかかわり方がおかしいということ、あらためて確認できた様子であった。

あるいは下川は、内田の家で食事をご馳走になり休みの日には泊まったりもしている。笑いが絶えない内田の家の食事に比べ、下川の家では「黙って」「瞑想してる感じ」なのだとい、自分の家族を対比的に見ている。

このように彼女らは友人の家で多くの時間を過ごすなどして、自宅では難しい家族団欒など精神的な家族機能を代替するとともに、第三者からの客観的な視点を通して、現在の親との関係が特別に閉鎖的なものであることを認識している。そうしたつながりのなかで、彼女らは自分の家族を相対化し、閉鎖的な

その関係に一定の距離をとることができているのである。

なお、家族を相対化する契機としては、離家がその典型的なものの一つといえる。本調査対象者のなかにも、親との対立から逃れるように離家したのち、物理的にも精神的にも距離を保った生活を過ごすことで、以前までとは違った関係を親との間に築くことが可能となった者もいる。本稿で取り上げている3名についても、葛藤に満ちた家族関係から逃れるために、程度の差こそあれ離家を望んでいる。しかし彼女らの場合、経済的に自活できるだけの元手がないということと、親子関係のねじれが容易には絶ちがたいほどに絡まっており、実現が難しくなっている。

そうした制約の下に置かれている彼女らであるが、浜野でいえば西澤の家を「第二の家」としていること、あるいは若林でいえば母親の元を離れて祖母の家で生活をする、下川では内田の家庭で食事をともにしたり泊まるなどすることは、彼女らなりの仕方であ家からの距離を保とうとしている試みと捉えることも可能であろう。こじれた家族関係を脱するほどには至っていないものの、家族内部のみに閉ざされているわけでもない彼女らの現状は、持ちうる資源の制約の下で親との関係の変容・組み換えを試みるなかで生じている彼女らなりの離家のかたち、いわば「中間的な離家」とも言うのではないだろうか。

(4) 小括

以上見てきたようなネットワークの様相を、個々人にとっての自立をめぐる課題という側面から捉えてみよう。「自立」とは、社会的・経済的に一人でやっていけるという「独立 (independence)」という側面と、自らの裁量の下で行動を決定していけるという「自律 (autonomy)」という側面との二通りで捉えられる¹¹⁾が、現状においてこのネットワークが果たしているのは後者の「自律」である。前者の「独立」もまた、彼女らが切望するところではあるものの、活用可能な資源の乏しさや家族との軋轢のなかで、先は見えない状況に置かれている。一方、仕事や家庭においては自己の置き場もなく、半ば翻弄されるように過ごしている彼女らであるが、この友人ネットワークという領域においては、彼女らなりの裁量性を発揮できる貴重な場となっている。

それを端的に示しているのが、仕事や家庭では描きづらい自分の将来を、友人との関係においては明確に描けているという下川の展望についての語りである。下川は無業状態が続いていた3年目に、5年後10年後の将来について、具体的なものは何も描けないと言いながらも、内田と一緒にいる、ということだけは確信を持って答えている。この関係は、なんらかの社会的・制度的位置づけを確保しているわけではなく、今後もずっと続いていくかどうかの保証もない。しかし少なくとも主観的レベルにおいて、過去から現在、そして未来にまで通じるような時間的継続性を感じられるような場があるということは、彼女らのアイデンティティを多少なりとも安定的に保つための重要な源泉となっているのである。

5. おわりに

本稿では、職業的移行だけでなく家族関係を含めた生活世界を視野に入れ、かつ一時点ではなく〈子どもから大人へ〉の長期的な過程に即して分析を試みた。

第一の課題と関連する第3節では、離職、転職、無職を繰り返してきたように彼女らが不安定な働き方を強いられていること、同時に家族においても問題を抱えており、移行を支える家族資源の欠如のみならず、貧困とも絡んだ母親の娘への支配／依存といった家族関係のこじれを生じさせていることを明らかにした。そして、家族間問題と就労とがどのように関係しているかに目を転じると、不安定就労であるがゆえに家族問題を生起させてしまうパターンや、家族問題の深刻さが就労を不安定にさせているパターン、更には不安定な就労によって引き起こされた家族問題が再び就労に負の影響をもたらす悪循環に陥っているパターンが見出された。

第二の課題と関連する第4節では、友人を中心とするインフォーマル・ネットワークと自立の契機について明らかにした。経済的事情や親からの干渉により、時にはその利用・アクセスに制約がかけられながらも、彼女らのネットワークは、次第に広がりと深まりを見せていた。そして、何より本稿の重要な知見としては、インフォーマル・ネットワークという足場を持つことで、家族問題

に対して一定距離をとり、僅かながらでも自己の裁量権を持つことのできる余地や視点が差し込まれていたということである。本稿ではこれを自立の契機という点から考察した。

以上の議論を受けて、今後の課題ともかかわった知見を述べておきたい。まず、不安定就労や家族問題との相互作用といった悪循環を断ち切るために必要とされるのは、若者自身の就労支援にとどまらない包括的な移行支援システムの整備であろう。家族、そのなかでも親自身が貧困や病気、DVなどさまざまな問題を抱えていたことが、彼女らの不安定な移行パターンと深く結びついていたからである。そこからは、家庭に対する支援やネットワークを支えるための基盤整備などといった具体的項目などが想起されてくる。自立にかかわっては、インフォーマル・ネットワークが今後どのように維持・変容していくのかを、その存立基盤・社会的条件と共に丁寧に追っていく必要があるだろう。現状においてこのネットワークは、仕事や家庭における困難を脱していくための基盤にはなりえておらず、あくまで部分的な「自律」を実現する場となっているにすぎない。しかし今後の変容如何では、そのネットワークは彼女らなりの「自立」の型を形成する基盤となりうるのではないだろうか。

〈註〉

- 1) 一例として、労働政策研究・研修機構（旧：日本労働研究機構）が実施した一連の調査などを参照。
- 2) 本稿と同様のデータを用いた分析として、インフォーマル・ネットワークが果たしている機能について分析したInui and Nishimura (2007)、高卒で不安定な社会生活を送る女性たちの移行過程・生活世界を厚みのある記述で展開した杉田 (2009) も参照。本稿課題との関係でいえば、前者は3年目調査時点での考察であり、本稿ではそれ以降のネットワークの変容やネットワーク形成の資源などへの分析を組み込んでいる。後者は個々の若者を中心に据えることにより、若者の移行過程・生活世界の全容へと迫っているのに対し、本稿では労働と家庭、そしてネットワークと家庭など、それぞれの生活局面同士の関連に重点を置いた分析となっている。
- 3) インタビューの事前調査として、対象となる東京の統計調査分析や都内全高校対象のアンケート調査・分析も行なっている。インタビューの実施年度・対象者は以下の通り。第1回：2002年度・89名、第2回：2003年度・53名、第3回：2005年度・39名、

第4回：2007年度・31名（乾ほか2003,2005,2007,2009、乾編2006）。また、四年制大学進学者の就職活動に関するインタビューも行なった（2006年度・8名）（児島ほか2008）。

- 4) 一例として、堀編著（2007）を参照。
- 5) 短大に進学した若林の進学費用は、母子世帯に対する融資を利用するとともに、母親が祖母に頭を下げてどうか工面してもらったものである。同時に、生活保護ケースワーカーに対しては、親の介護をしながら夜間の学校に通っている、という名目にするこゝで、ようやく進学が可能となっている。
- 6) もちろん世帯分離をして対応する、という手だても考えられるものの、家事や介助などしてくれるヘルパーなど他人を家に入れることを拒む母親にとって、若林がいなくなってしまうこともまた、耐えられない選択なのである。なお2007年インタビュー時には、生活保護ケースワーカーの働きかけもあってか、世帯分離を行なったようで、一人暮らしのためのアパートを借りていた。
- 7) 「地元ネットワーク」といったときの「ネットワーク」とは、諸々の個別的つながりが相互に関連しあい、なんらかの共通項を媒介として形成される一定規模の広がりを指している。それに対して本稿では、個々人の移行における困難に焦点を当てるため、対象者個人が取り持っている関係の束として「ネットワーク」を扱う。諸関係が織りなす網の目としての「地元ネットワーク」そのものの特質・変容については、他稿を期したい。
- 8) 久木元（2007）は、統計調査から、フリーターは正社員などに比して、相談ネットワークが周囲の親密な他者から広がらないことを見出している。本調査の知見においても、やはり対比としてはその傾向は見出せるものの、詳細に彼女らの語りを追っていけば、けっして「広がらない世界」と断ずることはできない。
- 9) 自分（たち）とは異なる他者であればあるほど、得られる社会関係資本の有用性が高いという知見については、Granovetter（1973=2006）参照。
- 10) 同様に、かつては「キャラ」を固定化させて付き合っていたため、弱さを見せられないままにいた同じクラスの友人らとも、最近では「お互いに叱ったり」できる関係へと変化したという。
- 11) 「自立」区分には、社会的／精神的などさまざまな区別けがとりうるが、ここでは藤井（2008）参照。

〈参考文献一覧〉

[本調査に基づく論考]

乾ほか（2003）（2005）（2006）（2007）（2009）

乾彰夫・上間陽子・木戸口正宏・椎林美樹・杉田真衣・竹石聖子・西村貴之・宮島基・芳

- 澤拓也・渡辺大輔「『世界都市東京』における若者の〈学校から雇用へ〉の移行過程に関する研究」東京都立大学教育学研究室『教育科学研究』第20号、2003年
- 乾彰夫・新井清二・有川碧・杉田真衣・竹石聖子・西村貴之・藤井吉祥・宮島基・渡辺大輔「“高校卒業1年目”を生きぬく若者たち—『世界都市東京』における若者の〈学校から雇用へ〉の移行過程に関する研究Ⅱ」東京都立大学人文学部『人文学報』359号、2005年
- 乾彰夫・安達眸・有川碧・遠藤康裕・大岸正樹・児島功和・杉田真衣・西村貴之・藤井吉祥・宮島基・渡辺大輔「明日を模索する若者たち：高卒3年目の分岐—『世界都市東京』における若者の〈学校から雇用へ〉の移行過程に関する研究Ⅲ」首都大学東京都市教養学部人文・社会系／東京都立大学教育学研究室『教育科学研究』第22号、2007年
- 乾彰夫・児島功和・進藤正樹・中村（新井）清二・原未来・藤井吉祥・船山万里子・三浦芳恵・宮島基「『新時代』を働き・生きる若者たち：高卒5年目の^{バイオグラフィ}人生経路—『世界都市東京』における若者の〈学校から雇用へ〉の移行過程に関する研究Ⅳ」首都大学東京都市教養学部人文・社会系／東京都立大学教育学研究室『教育科学研究』第24号、2009年
- 乾編（2006）
- 乾彰夫編・東京都立大学「高卒者の進路動向に関する調査」グループ著『18歳の今を生きぬく』青木書店
- Inui, A. & Nishimura, T. (2007) “The Only Future Certainty is that I’ll Still be Speaking to her”: Social Capital/Network for the Transition of Disadvantaged Young People, in *Educational Studies in Japan: International Yearbook, No.2*
- 児島ほか（2008）
- 児島功和・中村（新井）清二・乾彰夫「大学生の就職活動のインタビュー分析」首都大学東京都市教養学部人文・社会系／東京都立大学人文学部『人文学報』第396号
- 藤井吉祥（2008）「親子関係における若者の『自立』—質的調査による考察」首都大学東京都市教養学部人文・社会系／東京都立大学教育学研究室『教育科学研究』第23号
- 杉田真衣（2009）「大都市の周縁で生きていく—高卒若年女性たちの五年間」中西新太郎・高山智樹編『ノンエリート青年の社会空間』大月書店
- 〈その他〉
- 新谷周平（2007）「ストリートダンスと地元つながり」（本田由紀編『若者の労働と生活世界—彼らはどんな現実を生きているか』大月書店
- 部落解放・人権研究所編（2005）『排除される若者たち—フリーターと不平等の再生産』解放出版社
- Granovetter, M. (1973=2006) “The Strength of Weak Ties”; *American Journal of Sociology*, Vol. 78, No. 6, (マーク・グラノヴェッター（大岡栄美訳）「弱い紐帯の強さ」野沢慎司編・監訳『リーディングス ネットワーク論—家族・コミュニティ・社会関

係資本』勁草書房)

- 堀有喜衣 (2004)「無業の若者のソーシャル・ネットワークの実態と支援の課題」『日本労働研究雑誌』553号
- 堀有喜衣編 (2007)『フリーターに滞留する若者たち』勁草書房
- 小西二郎 (2002)「ノンエリート青年の「社会」形成：北海道小樽市A工業高校出身者を事例として」『唯物論研究年誌』第7号、青木書店
- 小杉礼子編 (2005)『フリーターとニート』勁草書房
- 久木元真吾 (2007)「広がらない世界—若者の相談ネットワーク・就業・意識」堀有喜衣編『フリーターに滞留する若者たち』勁草書房
- 宮本みち子 (2009)「若者の貧困を見る視点」『貧困研究』第2号、明石書店
- 中西新太郎・高山智樹編 (2009)『ノンエリート青年の社会空間—働くこと、生きること、「大人になる」ということ』大月書店
- 信田さよ子 (2008)『母が重くてたまらない 墓守娘の嘆き』春秋社
- 大澤真平 (2009)「不平等な若者の自立」湯浅誠・富樫匡孝・上間陽子・仁平典宏編著『若者と貧困』明石書店
- 斎藤環 (2008)『母は娘の人生を支配する なぜ「母殺し」は難しいのか』NHKブックス
- 内田龍史 (2005)「強い紐帯の弱さと強さ—フリーターと部落のネットワーク」部落解放・人権研究所編『排除される若者たち』解放出版社